

【追補2】(2008年6月23日)

2008年6月8日付け産経新聞東京版にこの書評が取り上げられた。直ちに私はその記事の中の光文社のコメントと、私宛に届いた野崎氏の手紙に対する反論を書いた。野崎氏の手紙は絶版も全面改訳も拒否するものである。私の反論は産経新聞に掲載される予定だったが、光文社から産経新聞に対する働きかけの結果、没になった。ここに全文引用して、現時点での私の立場を明らかにしておきたい。

『赤と黒』新訳の出版社・訳者の無責任な対応について

立命館大学教授 下川茂

本紙桑原聡記者の6月8日付けの記事によれば、野崎歓氏訳『赤と黒』を古典新訳文庫の一冊として刊行した光文社の文芸編集部長駒井稔氏は、誤訳を指摘した私の書評について、「読者からの反応はほとんどすべて好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております」、「些末な誤訳論争に与する気はまったくありません」とコメントしている。「誤訳論争」が「些末」だとする駒井氏の発言は、編集者としての責任を放棄するものであり、読みやすさだけを訳者に求める出版社に古典の新訳を出す資格があるとは思えない。

書評で指摘したが、翻訳がまず満たすべき目標が原文の意味を正しく伝えることであることを訳者野崎氏は認めており、第3刷で何箇所か誤訳を訂正している。しかしこの訂正は氏の自発的な見直しによるものではなく、氏の手へ渡った誤訳リストで指摘された箇所だけ、読者に内緒で訂正したものである。絶版・全面改訳を勧める私の手紙に対して、野崎氏は、書評で指摘された「解釈上のミス」は「よく検討」した上で「機会に恵まれ」たら修正する、又、「総計数百箇所あるとの」ミスの箇所を「ご教示いただきたい」と回答してきた。しかし、「総計数百箇所」のミスを氏がもし認めて訂正すれば、その結果できた翻訳はもはや野崎氏の単独訳とはいえなくなる。そもそも氏の誤訳はほとんどが既訳を丁寧に参照しさえすれば避けられたものであり、中には極めて初歩的な誤りもある。まもなく五十歳になるベテラン仏文学者に「ご教示」するようなものではない。「解釈上のミス」と氏はばかり、「検討」の余地があるように書いているが、私が指摘した氏の誤訳は全て議論の余地の無い単純な誤訳であり、だからこそその一部を知った野崎氏は第3刷で訂正したのでだろう。自ら訳全体を見直すことをせず、人から指摘された箇所だけ「機会に恵まれ」たら訂正していくという野崎氏の姿勢は、翻訳は読みやすければよく、誤訳など「些末な」問題だとする駒井氏と、読者に対する無責任という点で大きな違いはない。

第3刷で訂正された誤訳はごく一部である。大きな欠落箇所も残っている。いつまで野崎氏と光文社はこの前代未聞の欠陥翻訳を売り続けるのだろうか。私の書評が掲載された会報は日本スタンダール研究会のホームページで公開されている。読者諸賢は誤訳・不自然な日本語の数々を是非そこで確認して頂きたい。